

●芸備線の主な歩み

- 1912(明治45)年4月30日 芸備鉄道株式会社設立
- 1915(大正4)年4月28日 東広島―志和間開業
- 1915(大正4)年6月1日 志和地―三次(現西三次)間開業
- 1920(大正9)年7月15日 東広島―広島間開業
- 1922(大正11)年6月7日 三次―塩町(現神杉)間開業
- 1923(大正12)年12月8日 塩町―備後庄原間開通
- 1930(昭和5)年2月10日 三神線備中神代―矢神開業
- 1930(昭和5)年11月25日 矢神―東城開業
- 1933(昭和8)年6月1日 十日市(現三次)―備後庄原間が国有化し庄原線となる
- 1934(昭和9)年3月15日 備後庄原―備後西城間開業
- 1935(昭和10)年6月15日 東城―小奴可間開業
- 1935(昭和10)年12月20日 備後西城―備後落合駅間開業
- 1936(昭和11)年10月10日 小奴可―備後落合駅間が開業し、三神線が全通。現在の芸備線区間が全通
- 1937(昭和12)年7月1日 広島―備後十日市(現三次)が国有化し、備中神代―広島間が芸備線に改称
- 1953(昭和28)年10月31日 広島―米子間に木次線経由の週末快速「ちどり」運転開始
- 1962(昭和37)年3月15日 準急しらぎり、たいしゃく運転開始
- 1971(昭和46)年3月25日 SL(蒸気機関車)廃止
- 1987(昭和62)年4月1日 国鉄民営化でJR西日本が路線継承
- 1990(平成2)年3月10日 急行ちどり木次線乗り入れ廃止
- 1991(平成3)年4月1日 一部でワンマン運転開始
- 2002(平成14)年3月23日 急行ちどり、たいしゃく廃止



山沿いを進む(比婆山―備後落合間)



列車に乗り込む多くの乗客(東城駅:昭和48年6月撮影)

参考文献:芸備線米寿の軌跡(晋文社)、げいびグラフィック第130号(同)、資料で見る広島県の道のあゆみ(広島県立文書館)、芸備線中国山地の沿線物語(著:武田祐三/シニセイアート)写真提供:山岡亮治・清原正明



芸備線の魅力に
触れてください

武田祐三さん

JR芸備線沿線の魅力を記した「芸備線中国山地の沿線物語」を出版。高町在住。

自動車が高価で手が届かない時代、芸備線の列車は私たちの夢をも乗せて走っていました。往時には、みんなが芸備線に乗り、どの駅も活気にあふれていました。私も随分お世話になりました。自動車社会になってから利用客の激減で、運行される便数も減り寂しくなりましたが、芸備線は単なる移動手段としてではなく、地域の魅力を高める資源としての側面もあります。芸備線の魅力は何と言っても、車窓から眺める景色のすばらしさです。ゆっくりと、そして時に軽快に線路を走る姿も印象的です。列車が奏でる音、心地よい揺れが、読書をするにも最高です。皆さんにもそれを味わってほしいですね。

特集

芸備線のある風景

―人とまちをつなぐレール―

開業から100年の歴史を刻んできた芸備線。かつては多くの乗客と物資を運び、備北地域の繁栄を支えてきました。しかし、利用者の減少によって、芸備線を取り巻く状況は厳しくなっています。これまで当たり前になっていた列車が、もしかすると当たり前でなくなってしまうかもしれない。この節目に、芸備線についてスポットを当てます。

ゆっくりと高駅に入線するディーゼルカー

歴史を刻む芸備線

つながったレール

芸備鉄道と国鉄三神線

現在、広島駅から岡山県の備中神代駅(新見市)まで、総延長159.1キロを結んでいるJR芸備線。大正4年4月28日に私鉄の芸備鉄道として開業したのが始まりです。当時は広島駅から東に500メートル離れた場所にあった東広島駅が起点で、志和地駅までの59キロの船出となりました。同年6月1日に三次(現西三次)駅まで延長され、66.7キロの全線営業が開始。三次駅から庄原方面に向けては、大正11年6月7日に三次―塩町(現神杉)間が、同年12月8日には塩町―備後庄原間が開通しました。

この延伸とは別に、鉄道省によって備中神代駅を起点にした国鉄三神線の建設が進められました。昭和5年2月10日に矢神駅まで、同年11月25日には東城駅までが開業しました。別々に建設が進められた芸備鉄道と国鉄三神線でしたが、

島―米子間に木次線経由の週末快速「ちどり」が運転を開始。翌年10月9日からは毎日1便運行され、以後、陰陽連絡列車が一日に4往復にまで増加するなど、芸備線は一時代を築きました。そして鉄道は、大量物資の輸送を可能にしたことで、日本の発展に大きな貢献を果たしました。広島県北地域一帯は、農林産物の一大産地として重宝され、大消費地を結ぶ山陽線につながる広島まで大量輸送できる芸備線は、高度成長を支える動脈として活躍しました。

高度成長を支えた鉄道でし

時代と共に増便から減便へ

だが、道路整備が急速に進み、鉄道に影響を与え始めました。豊かになるにつれ家用車の普及も進み、昭和50年代に入ると、それが特に顕著になりました。高速道路の整備も乗客を減らす大きな要因となりました。路線バスが台頭し、利用者の低迷に拍車がかかりました。国鉄民営化後も厳しい経営は続きました。乗務員のワーマン化など経営努力を進めるも、全国的に経営難に陥る路線、私鉄が相次ぐようになりました。芸備線も乗客減の流れは止められず、快速列車の廃止、減便、駅の無人化が進められ、現在に至ります。

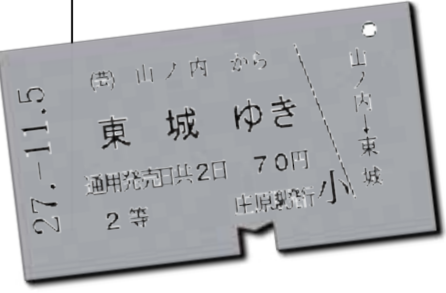
経営難に陥っていた芸備鉄道が昭和8年6月1日、十日市(現三次)駅―備後庄原駅間を国に売却したことで、ひとつの転換期を迎えることになりました。以後、備後庄原駅から備後西城駅へは昭和9年3月15日、備後落合駅までが昭和10年12月20日に開業。三神線は昭和10年6月15日に小奴可駅まで、翌年10月10日には備後落合駅までが開業しました。これにより、それぞれ延びてきたレールが1本につながり、現在の芸備線が完成しました。

備北地域を潤すライフライン

短時間で目的地に移動できる鉄道は、人々の生活に無くてはならないものになりました。駅は多くの人が行き交い、駅周辺は飲食店や商店が並ぶなど活気に満ちていました。それは、芸備線沿線も同様でした。往時を知るだれもが「昔は、どの駅も人があふれ、すぐくにぎわっていた」と振り返ります。昭和28年10月31日には、広

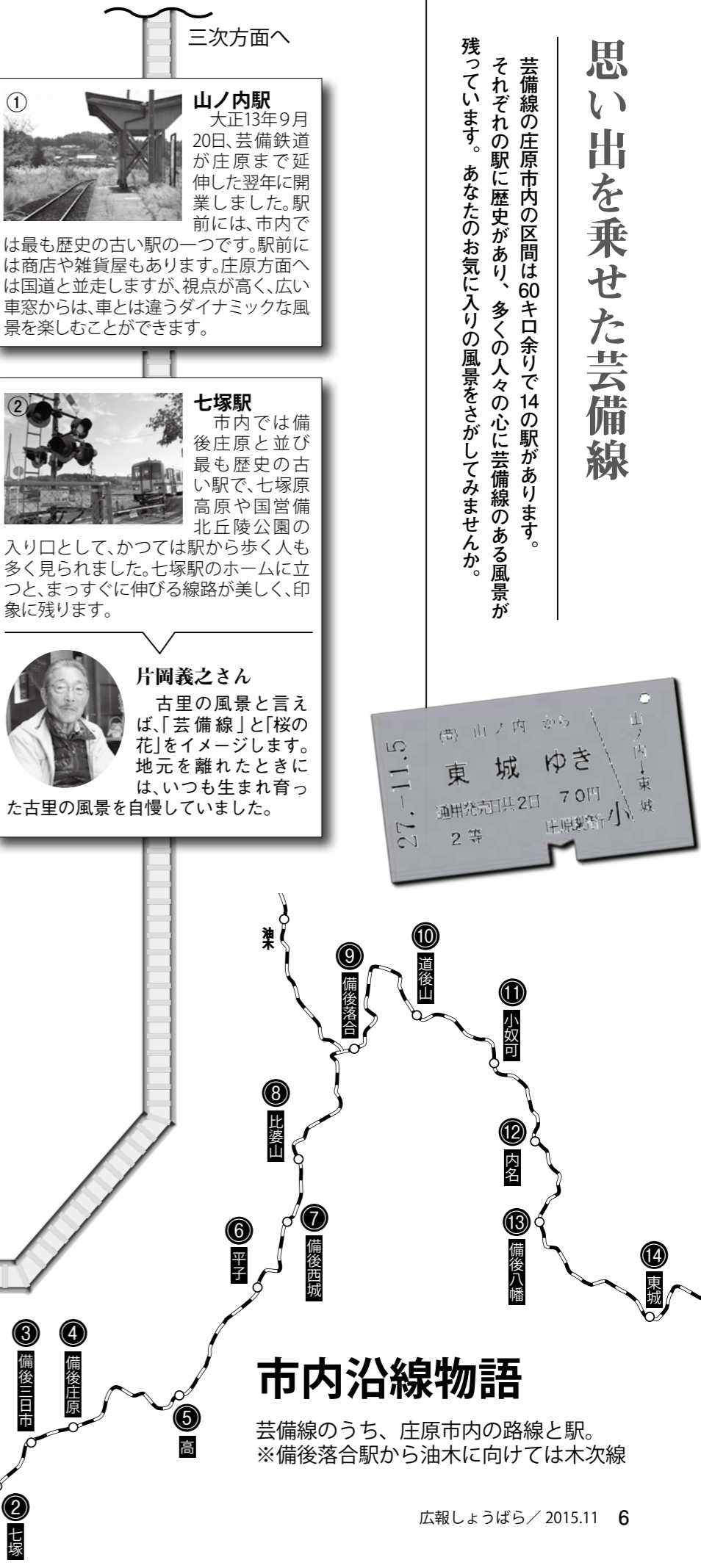
思い出を乗せた芸備線

芸備線の庄原市内の区間は60キロ余りで14の駅があります。それぞれの駅に歴史があり、多くの人々の心に芸備線のある風景が残っています。あなたのお気に入りの風景をさがしてみませんか。



市内沿線物語

芸備線のうち、庄原市内の路線と駅。
※備後落合駅から油木に向けては木次線



三次方面へ

① **山ノ内駅**
大正13年9月20日、芸備鉄道が庄原まで延伸した翌年に開業しました。駅前には、市内では最も歴史の古い駅の一つです。駅前には商店や雑貨屋もあります。庄原方面へは国道と並走しますが、視点が高く、広い車窓からは、車とは違うダイナミックな風景を楽しむことができます。

② **七塚駅**
市内では備後庄原と並び最も歴史の古い駅で、七塚原高原や国営備北丘陵公園の入り口として、かつては駅から歩く人も多く見られました。七塚駅のホームに立つと、まっすぐに伸びる線路が美しく、印象に残ります。

片岡義之さん
古里の風景と言えば、「芸備線」と「桜の花」をイメージします。地元を離れたときには、いつも生まれ育った古里の風景を自慢していました。

⑥ **平子駅**
昭和27年2月1日、地元の請願により新設されました。市内では2番目に新しい駅になりました。駅舎は二代目です。備後西城までの区間では、西城川に沿った桜並木を車窓から楽しむこともできます。

⑤ **高駅**
当時の国鉄庄原線が備後西城まで延伸される際に開業しました。高駅の前後は、標高差も少なく見通しが良いところが多いため、軽快に流れる車窓が心地よい区間です。

定光 伸さん
美保子さん
近くに牛を祀った神社があり、芸備線を利用してお参りに訪れる人が多かったです。駅前では商店をしていますが、毎月行われる祭には供え物をよく買いに寄ってくださっていました。現在、私たち2人で駅舎の掃除や草取り、花を植えるなどして駅の美化活動を行っています。

④ **備後庄原駅**
大正12年の開業以降、全面的な建て替えが行われたことは無く、開業当時のままの木造駅舎ですが、駅舎の一部が子育て支援センターとして利用されるなど、時代と共に改修が重ねられています。駅前の土地区画整理事業も進み、住民組織による「駅前フェスタ」などのイベントも行われています。庄原の玄関口として、これから新たな歴史を刻んでいきます。

③ **備後三日市駅**
昭和5年4月25日に開業しました。小さな坂を上った先に、ホームと小さな待合室がひとつ。ここだけの時間が流れているような気がする、庄原の隠れた名所です。

⑦ **備後西城駅**
市内の芸備線の駅では備後庄原駅に次いで利用が多く、今ではすっかり減ってしまった対面式のホームも現役で使用されています。駅舎には美容院や観光協会の事務所があり、今でも人の手から切符を買うことができます。駅前には商店もあり、地域の中心として機能してきた歴史を感じることができます。

安原 克さん
教員時代に「西城はまちなかを列車が走り、雰囲気があったいい町ですね」と声をかけられることが多くありました。住んでいる私自身、その当時「そうなのか」とどこか他人事のようにも思いましたが、旅館業を営むようになり、改めてその良さを感じるようになりました。懐かしい町並み、西城川、そして芸備線が合わさる情景は、よそにはないオンリーワンの魅力があります。

⑧ **比婆山駅**
備後西城～備後落合の延伸にあわせ、昭和10年12月20日に「備後熊野駅」として開業しました。かつては多くの参拝者が訪れていた熊野神社の玄関口として、社殿を模した特徴的な駅舎を有しています。駅前の記念碑は開業に尽力した地元の人々の熱意を今に伝えています。

竹内聖子さん
駅をきれいにしたいという思いから、地域の方と駅舎周辺を花で飾りはじめて15年になります。また、私は5年前から美古登郵便局で、さとやまオープンガーデンにも参加し、芸備線で見に来てくださる方もいらっしゃいます。見送る際に、列車に向け手を振ると、皆さん笑顔で手を振り返してくださいます。こうしたふれあいも芸備線の魅力です。

⑪ **小奴可駅**
猫山をバックにディーゼルカーが行き来する景色が美しい小奴可駅。簡易委託駅となっており、切符を買うことができます。駅前には商店もあり、地域の中心として機能してきた歴史を感じることができます。

林 嘉啓さん
小学生の頃はSLが全盛で、駅の見学で訪れた際に、石炭をくべたり、運転席に座ったりさせてもらったのを覚えています。秋になると駅のホームには各地に発送するりんごのケースが山積みで、広島や岡山からりんご狩りの貸切列車も運行されるなど、とてもにぎわっていました。

⑩ **道後山駅**
道後山駅は標高600メートルを超え、芸備線の駅では最も高くに位置しています。昭和11年11月21日、前月に小奴可～備後落合が開業し、現在の芸備線が全通した直後に開業しました。7キロほど離れた道後山には県内で最初に開業したスキー場があり、昭和13年に当時の鉄道省が「国鉄山の家」を建設。往時には道後山駅からスキー板をかついで道後山へ向かう利用客が多く見られたそうです。

⑨ **備後落合駅**
「秘境駅」として鉄道ファンの間で全国にその名が知られ、多くの人々が訪れます。木次線との接続もあるため、かつては多くの旅客で賑わい、大勢の職員が勤務していましたが、今は無人駅となっています。広い構内には、随所に往時を偲ばせる構造物が残っています。ホームに立って感じる独特の愁いが、この駅が人を引き付ける理由なのかもしれません。道後山駅との間にはおよそ150メートルの標高差があり、西日本有数の高さを持つ「第一小鳥原橋梁」を含む3つの鉄橋があるなど、芸備線のハイライトと呼ぶにふさわしい区間です。

⑫ **内名駅**
昭和30年7月20日の開業から、今年で60周年を迎えた内名駅。いわゆる「秘境駅」としても有名です。地域住民でない方にとっては、鉄道でなければなかなか通ることの無い場所かもしれませんが、それが「秘境駅」としての人気につながっているようです。

⑬ **備後八幡駅**
東城～小奴可間の延伸に合わせて開業しました。付近には、かつて存在した帝国製鉄の工場に向かって延びていたトロッコの鉄橋が残り、鉄どろとして栄えた沿線の歴史を今に伝えています。

⑭ **東城駅**
東城駅は、当時の国鉄三神線の一部として昭和5年11月25日に開業しました。開業時は新見から伸びてきた線路の終点で、東城駅周辺は大変な賑わいがあったといえます。駅の北側には広い鉄道用地と引込み線が残り、地域の中心駅であったことがよくわかります。ホームにはかつて走った急行の案内表示がうすらと残り、往時を偲ばせます。

小田綾子さん
恵子さん
当時から駅前でお店をしています。花火や祭りがあれば駅からものすごい人が出てきて、お店に寄ってくださる人も多く、懐かしい思い出です。母は高島田を結び、花嫁衣裳で比婆山駅から汽車で東城駅に来て、多くの人から祝福を受けたようです。平成17年末から6年半ほど委託を受けて切符を売りました。振り返ると芸備線との縁を感じますね。

新見方面へ

芸備線がつなぐもの

愛着はあるも、乗ることが少なくなった芸備線。このまま利用者が増えなければ「廃止」になってしまう可能性はぬぐえませんが、そうならないためには、とにかく利用者が増えることです。

とはいえ、これまでの状況から利用者を増やすことは簡単ではありません。それでも何かのきっかけで、利用者が増えるかもしれない。そういった思いで芸備線を盛り上げようとする動きが市内で広がりを見せています。

田森自治振興区が 内名駅開業60周年を祝う

7月20日で開業60年を迎えた内名駅。この節目を祝う行事が10月4日、田森自治振興区主催で行われました。

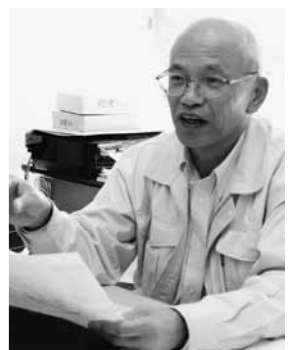


運転士に花束を手渡し、到着を喜ぶ

「地域をどうにか盛り上げたい」という思いがあった。し、地域を守り育てていく新たな契機にしようと記念事業を企画。記念セレモニーでは、列車の体験乗車や乗務員への花束贈呈、記念植樹などが行われ、地域住民と共に節目の年を祝いました。



内名駅ようこそ！と書いた手作りの旗を作り、笑顔で列車を迎える地域の皆さん。



田森自治振興区
事務局長

今岡 良道さん

そう語るのには、田森自治振興区事務局長の今岡良道さん。駅名の由来となった内名地区は、東城町竹森地域の中でも特に過疎・高齢化が著しく、現在ある7世帯のほとんどが高齢世帯。現在、駅を通り過ぎる便数は3往復と少なく、乗降する人はほとんどいません。往時を知る人も減り続けています。

こうした状況で、このまま内名駅がもし無くなってしまうということになれば、地域にとって損失だという思いがあります。地元にある駅が知らぬ間にできて、無くなっていったというのでは余りにも寂しく、それでは地域を愛する気持ちも育たない。そんな気持ちから、「内名駅ができた経緯や歴史を我々が知り、次

の世代にきちんと伝えていくこと。地域を大事にしたいかないといけないうちという気持ちになってもらいたい」と強く願っています。

内名駅と芸備線をキーワードに地域を見つめる機会を得た今回の行事。その様子は、振興区のホームページで紹介・発信しています。鉄道ファンからは秘境駅として知られる内名駅。「これを契機に一人でも二人でも、内名駅を訪ねてきてくれればうれしいですね」と話しています。

地元有志が備後落合駅で 記念イベントを計画

西城町にある備後落合駅も、12月20日で開業80年という節目を迎えます。この節目の日を盛り上げようと、企画を練っている地元のグループがいます。

同グループは、75周年の際にも備後落合駅を盛り上げるイベントを企画。同駅の売店で売られていた「おでんうどん」を再現し、来訪者に振る舞いました。

「反響がすごく、庄原市内の多くの方から声をかけていただきました。おでんうどん



記念イベントに向け話し合うメンバー

は、この駅を利用して来た人にとって思い出の味であり、強く記憶として残っているんです。代表の今村俊洋さんは熱いまなざしで続けます。「ぜひ今回も、おでんうどんを再現し、皆さんに懐かしんでもらいたい」。

まつわる懐かしい写真も展示する予定です。

「備後落合駅を記憶として次世代に継承していくことが、私たちが今できること。小さな取り組みですが、芸備線に乗るきっかけを少しでもつくることで、芸備線のある風景を守り続けていきたい」とメンバーは口をそろえます。

おでんうどん
平成2年まで備後落合駅で約10年間販売。閉店後は、同駅から西へ約1キロにある「ドライブインおちあい」が味を受け継ぎ、販売を続けています。おでんの具が3つ入るのが特徴。自家製トウガラシを付けていただきます。腰のあるうどん、だしは化学調味料無添加。9月～翌年5月までの期間限定。

まちづくりに芸備線を活用 おっ！駅前フェスタ

平成25年から備後庄原駅前が始まった「おっ！駅前フェスタ」。駅前の再開発にあわせ、事業者や地元関係者、行政などをつくる「庄原駅周辺地区まちづくり協議会」が発足し、駅前周辺を盛り上げようと始まりました。



その駅舎を利用して、これまで蓄音機や地元吹奏楽団によるコンサートを行ったり、カフェを開いたりして、話題を集めています。駅前の広場や空き店舗は出店で埋まり、普段まばらな駅前が、回を重ねるにつれ多くの人が集まり、にぎわいが生まれています。

同協議会会長の西田学さんは「私たちが忘れていた昭和の時代に大事にして来たものを、芸備線は思い起こさせてくれる存在。いつまでも残したい風景です」と語ります。

再開発が完了するのは、東京オリンピックが行われる平成32年の予定です。「このイベントを続け、駅の利用者増と地域の活性化に少しでも貢献できれば」と力を込めます。

駅前を盛り上げます

駅舎の中にたたくと何かホッとする備後庄原駅は、全国に残る数少ない木造駅舎の中でも大きな建物の一つで、将来は産業遺産となるように残していきたいと考えています。ぜひ一度訪れてみてください。このイベントを継続して、国営備北丘陵公園など市内の観光地への「花と緑の玄関口」になればと思っています。

イベントに協力いただいている皆さんは、それぞれの視点で自由に駅を盛り上げてくださっています。今後もさまざまな仕掛けをしていきたいと考えています。市民の皆さんからのアイデアもお待ちしております。



庄原駅周辺地区
まちづくり協議会会長
西田 学さん



右・松本 梢さん・うららちゃん
子どもと一緒に楽しめるので、毎回来ています。出店するお店も増えてきて、駅前がにぎやかになってきたと感じます。

左・角谷 啓子さん・綾音ちゃん
初めて来ましたが、とてもいいイベントですね。芸備線に乗れるイベントもあれば、もっと楽しめると思っています。

「気持ちのいい駅に」 各駅で広がるボランティア

駅は人がまちへ降り立つ玄関口。駅によってまちのイメージが作られることも。そんな駅をきれいにするボランティアの輪が広がっています。その一部をご紹介します。

七塚アナノコ会が 七塚駅で花いっぱい運動

国営備北丘陵公園への玄関口として利用される七塚駅。地元老人会の七塚アナノコ会は、公園へつながる駅のイメージアップを目的に、駅の構内や周辺に花を植えています。年3回季節の花を植え替え、年間を通じて花で駅を飾っています。



西城紫水高・東城高の生徒 がボランティア清掃

西城紫水高では年に4回クリーン作戦として備後西城駅の駅舎や周辺を清掃。東城高でも東城応援隊として年2回、東城駅や町内の清掃活動を実施しています。この活動は、生徒たちが地域のことを知るよい機会にもなっています。



東城高

盛原元紀くん
西城紫水高3年
いつも利用している駅なので、恩返しのため少しでもきれいにしたいと取り組んでいます。



瀬尾稜那さん
東城高2年
私たちの活動で、町内が少しでもきれいになれば、うれしいです。



西城紫水高



地域資源としての魅力度

鉄道は交通機関ですが、観光資源としての側面もあります。乗り鉄、撮り鉄と呼ばれる鉄道ファンが存在し、臨時列車の運行や現役車両の引退など、鉄道の話題あるところには、多くのファンが集まります。

こうしたファンの目から見た芸備線はどう映っているのか。鉄道の風景を撮り続けてきた広島市在住の山岡亮治さんに、芸備線の魅力とともに、今後何が求められるのかをお聞きしました。



山岡 亮治さん
44歳。出身は広島市。中国地方の各所で鉄道写真を撮影。週末になると広島市内の山岡亮治さんに、芸備線の風景を撮り続けてきた広島市在住の山岡亮治さんに、芸備線の魅力とともに、今後何が求められるのかをお聞きしました。

このエリアの最大の魅力は、四季の色彩が鮮やかで、景観が素晴らしいことです。標高が高く、寒暖の差も大きいため、春は桜に新緑、夏は青々とした田園、秋は紅葉、冬は雪景色と、四季を通じて沿線は魅力がいっぱいで、つい足が向いてしまいます。この風景と芸備線が溶け合う場面は、ここでしか出会えません。私は外から見ているので、

良く見えてしまうのかもしれませんが、そんな素晴らしい風景を日常的に見られる場所に皆さんは住んでいるということに、気づいていただきたいです。三江線の廃止方針の報道が流れましたが、この要因は、利用が少ないこと。もともと利用が少ない路線でしたが、少子化、過疎化が利用減に拍車をかけたことにあります。生活交通としての利用が維持できなければ、芸備線も同じ路を歩む可能性は否定できません。

あと、芸備線はこんなにも魅力的だったんだと思わせるような宣伝活動ですね。例えば、列車で旅するときの醍醐味は、車窓の風景を見ることですが、それを存分に堪能できるエリアとして、もっと発信をしていく必要があると思います。繰り返し発信し、芸備線の魅力を知る人を増やしていくこと。そうした取り組みの一つを積み重ねていけば、少しずつでも鉄道の賑わいを取り戻せるのではないのでしょうか。

ません。今後、利用者が劇的に増えることは難しいかもしれませんが、少しずつでも乗客を増やしていく取り組みを続けていくことが必要です。そのためには、市民の皆さんが芸備線を利用できるようにする。庄原市ではカープ応援隊が毎試合応援に行かれていますので、その際に月に一度でもいいので、芸備線を利用するということも案かもしれません。



株式会社中国トラベル東城支店 ツアーコーディネーター
上原 恭子さん
広島市内にある大型ショッピングセンター開業25周年記念のキャンペーンで、会員を対象にした芸備線100周年共同企画を提案した上原恭子さん。10月31日実施のツアーに参加した約50人が、広島駅から貸し切り列車で備後落合駅まで乗り、貸し切りバスも組み合わせて、列車の車窓から秋の景色と庄原市内の観光を楽しみました。

広島市内にある大型ショッピングセンター開業25周年記念のキャンペーンで、会員を対象にした芸備線100周年共同企画を提案した上原恭子さん。10月31日実施のツアーに参加した約50人が、広島駅から貸し切り列車で備後落合駅まで乗り、貸し切りバスも組み合わせて、列車の車窓から秋の景色と庄原市内の観光を楽しみました。

芸備線を素材にしたツアーを企画・提案
も組み合わせて、列車の車窓から秋の景色と庄原市内の観光を楽しみました。上原さんは「中国やまなみ街道ができて、国道183号沿線の通行が減り、寂しく感じていたので、特別列車を走らせることで、参加者と沿線の方々も、おもてなし地域PR、と共に楽しんでもらえると思った」とその意図を語ります。



庄原市観光協会専務理事 坂田忠則さん

芸備線を活用したツアーを展開します
父が国鉄の機関士だったこともあって、私も芸備線には人一倍思い入れがあります。芸備線は四季折々の風景が素晴らしく、観光資源としても魅力があります。その魅力を、もっと多くの人に知ってもらえるよう、芸備線を活用したツアーを、企画していきたいと考えています。

「今回のイベントはキャンペーンという条件でしたが、芸備線の魅力が少しでも伝わる一つのチャンスと捉えました。今後、プロジェクトにご協力いただける方々を募集し、観光協会や駅沿線の方々と連携を図り、芸備線の旅の良さをさまざまな方法で多くの人と一緒に味わいたい。次は桜の季節に計画したいと考えています」

芸備線ミニ旅行 (休日利用編)

芸備線に乗るっ！

ゆっくりにのんびり、芸備線の旅

「そうは言っても、普段乗る機会がない」という方も多くは、そんな方に、ちょっとした旅をご提案。「今日は時間があるなあ」と思ったら、とりあえず駅に向かってみよう。



行きの見どころは、平子駅と備後西城駅の間。西城市街地と西城川を眼下に望みながら鉄橋を渡る。



駅の構内や周辺を散策。待ち時間はあっという間。



備後落合駅から岡山支社に管轄が変わり、違った雰囲気を楽しめる。山の眺望、鉄橋など見どころも豊富。

おすすめコース

備後原駅から東城駅へ着バス利用コース
備後原駅 13時45分発
備後落合駅 14時31分着
備後落合駅 14時34分発
東城駅 15時22分着
東城駅到着後、徒歩で三楽荘～東城まちなみ散策、17時21分発高速バス広島行き、庄原バスセンター18時着

運転席横の大きな窓ガラスからの眺めは、スピード感が楽しめ、列車を独り占めした気分になれる。

滝口真登さんご家族

おすすめコース

備後原駅を出発し、備後落合駅で折り返すコース

備後原駅 7時31分発
備後落合駅 8時17分着
備後落合駅 9時12分発
備後原駅 10時着

備後落合駅では、1日に一度だけ、芸備線双方向と木次線からの列車3両が同時に見られる時間帯があります。時刻表を片手に、ぜひ訪れてみてください。



帰りの見どころは、備後落合駅と比婆山駅の間。トンネルを抜け西城川を横目に、山すそを縦走。

取材を終えて

芸備線100周年。沿線では記念行事も行われ、多くのメディアがこれを取り上げました。ただ、庄原市はその対象区間にかかっていないため、あまり触れられることもなく、同じ芸備線でも、どこか取り残されたような気持ちがありました。

今回、芸備線について多くの方にお話を伺いましたが、ほとんどの方が、よく聞いてくれたとばかりに、往時のにぎわいや子ども頃の頃の思い出を熱く語ってくれました。

取材を通して感じたことは、鉄道は町と町をつなぐだけでなく、時代を超え、人と人をつなぐ架け橋だということ。そして芸備線は、皆さんにとって

この週末は芸備線で紅葉狩りといきましょう。

の古里の風景そのものだという事です。

この風景を残していくことが、古里を守ることにもつながっていくはず。そして未来につながるその切符は、ここに住む私たちが握っています。